

御陵用水

現在、福井県立大学や福井大学医学部が建ち並ぶ旧五領ヶ島は、九頭竜川の表川と裏川との間に浮かぶ大きな中州状の「島」でした。

その五領ヶ島を潤したのが御陵用水です。裏川の埋め立てにより、「島」が陸続きとなった今も、同地区の農地を潤す用水として活躍しています。

五領ヶ島の歴史は洪水との闘いの歴史でしたが、御陵用水は十郷大堰の“漏れ水”の取水であったため、渇水期には十郷用水側との対立がしばしば起きました。



中でも最大のものは寛延 4 年(1751 年)の紛争です

この年は、水不足のうえ、定期的に堰の一部を開くという取り決めが守られなかったため、五領ヶ島の農民はこれに怒り、大挙して十郷大堰を破壊するという非常手段にでました。

堰を破壊された十郷用水側の 118 ヶ村の怒りは収まらず、江戸出訴(宝暦の大訴訟)まで発展し、その解決には 5 年の歳月を要しました。

この大訴訟の採決は、十郷大堰の 24 間を 8 月から翌 4 月まで切り落とすとしたもので、これは両者とも承伏できる内容でした。その切り落としには、井約の者が立ち会い、五領ヶ島から人足を出していました。以後、毎年 8 月 14 日は「公事祭」として仕事を休み、祭典を行う慣行となりました。

このように、先人たちは水争いを水利の協調に好転させ、地域を発展させてきました。